

# 特別支援教育研究計画

## 1 児童の実態

本学級の子どもたちの特徴として、まずあげられることは、話すという活動はどの子にとっても苦手な分野であるということである。なぜなら、「おとうさん」「おかあさん」「おしまい」「給食」などと、単語で話すことが多い子がいたり、その単語ですら、うまく発音、発声ができない子がいたりするためである。このように知的遅れや自閉症という障害のために、要求する言葉は発することはあっても、自分の気持ちを相手に伝えるという段階までには、ほとんどの子たちが達していない。特に自閉症の子どもたちにとっては、コミュニケーション能力に障害があることがその特徴のひとつとなっている。しかし、この子たちでも、読む（言う）という活動は、できる子が多い。それは、読むという行為が与えられた文字を言葉に発するということであり、自分で考えて言葉を見つけ、話すわけではないからである。これは、英語を身につけることに似ている。単語を覚え、英文を読むことはできるようになっても、自分の気持ちを英文で表現することは、とても難しいというように。

もうひとつの特徴は、話す、聞く、読む、書くというどの能力においても個人差が激しいということである。その結果、普通の国語の授業では、その子の実態に合わせた教材を用意し、その子の理解しやすい指導法で、その子のペースに合わせて学習を進めている。

3つめの特徴は、本人の苦手なことを指導する場合、集中力が持続しないことがあげられる。話すということも子どもたちにとって苦手な分野であるので、当然長い時間指導することは難しい。そこで、朝の会のスピーチなどで毎日、短い時間で繰り返し働きかけるようにしている。嫌なことでもがんばるんだ、根性だ、みんなやっているだからなどという働きかけは通用しないことが多い。

## 2 研究の方向性

「すすんで学び 豊かな表現で伝え合う児童の育成」という研究テーマにせまるために、特別支援教育部では、以下の方法を考えた。

(1) カードや絵、写真などの視覚的手がかりを活用し、構造化をはかる。

構造化とは、簡単に言えばきちんと整理された明確なパターンに物事を配置する行為である。自閉症の子どもたちは言語による理解が苦手なので、視覚的な手がかりを活用することで、教師の伝えたいことを理解させるようにする。また、たとえば、今日の自分の健康状態を「げんきカード」を黒板に貼ることで、みんなに伝えるということのように、自分の気持ちを伝えることにも役立つ。しかも、この方法は、知的障害の子どもにとっても、言葉ではなく絵で伝えるために、とても有効であることが証明されている。

(2) 模倣することをいろいろな場面で取り入れる。

先生の口を見ながら、同じように発音する行為のようにまずは、話す言葉を真似させるようにする。あいさつがそのひとつである。「おはようございます。」「さようなら。」「ごめんない。」「ありがとう。」などは、その場面場面で、言葉で発することを子どもたちに試みる。次に、あいさつの場面になったときに、「なんて言うの。」と問いかけ、オウム返しではなく、自分の言葉で自ら言葉を発するように働きかける。

(3) 読む活動を多く取り入れる。

読むことで、言葉の発音の仕方を学び、話し言葉の語彙を増やすようにしていく。その際には、できるだけ文字だけではなく、絵や写真も加えて、視覚からもその文の意味が理解できるような工夫をしていく。

(4) 読むなかで、単語や熟語の意味を丁寧に指導する。

読んだ単語や文を実際自分の話し言葉として活用するためには、その意味がわからなければならない。そこで、読んだ文を例にあげ、その意味を絵や動作などを加えながら、わかりやすく丁寧に指導していく。また、繰り返し読んだ文から穴埋め問題を作ったりなどして、前後の文脈から単語を見つけるなど読み取りの活動なども取り入れ、強化をはかるようにする。

(5) コンピュータを活用する。

コンピュータ即ちパソコンは、視覚的手がかりのとても有効な道具のひとつである。アイコンやショットカットは、その行為を示すシンボルとして表現されており、構造化の見本といってもよい。そのため、言語活動が苦手な子にとっても役立つ道具である。この道具を使うことで、自分がしたいことややってみたいことをマウスやキーボードで表現することができる。いわばパソコンとのコミュニケーションである。マウスで色をぬる、ひらがなを入力する、ページをかえるなど、自分がやりたいことを言葉ではなく操作で身につけることができる。

(6) 個別指導の工夫

それぞれの子どもの実態を把握して、個別指導を工夫する。